

比較副詞の容認可能性と文脈

高水 徹
香川大学

ttaka@earth.email.ne.jp

1 はじめに

本稿は「もっと」「ずっと」など、程度や比較に関わる副詞を対象とし、それらがどのような文脈で容認可能であるかを考察する。これらの副詞は、高水（2003）でみたように、当該の対象が、スケール上のある比較対象に対してどのような位置関係にあるかを示すものである。本稿ではこれらの副詞がもつ比較の側面が容認可能性に影響を与えるという立場をとるため、これらの副詞を比較副詞と呼ぶことにする。

第2節では、比較副詞がどのような語彙を修飾することができるかをみるために、まずこれらの副詞が修飾する語彙を形式的に分類する。ただし、本稿の主張は、形式的分類に基づき、比較副詞の容認可能性を示すことではない。むしろ、形式的基準のみではそれが判断できないことを言語事実に基づき示そうとしている。2.1では動詞を扱い、その行為に関連する項と量の関係に焦点を当てる。これに対して、2.2で扱うのは一見量とは関係のない動詞である。この場合、どのような要因によってスケールが喚起され、比較副詞が容認可能になっているかが中心的な問題である。2.3では、相対的位置関係を表わす名詞との共起を議論する。その際、容認可能であるものとそうでないもの間に存在する差異を提示する。さらに、それに基づき、それ以外の名詞と比較副詞の可能性を探るのが2.4である。

共起する語彙という狭義の文脈を扱う第2節に対して、第3節で扱うのはテンスや否定性などを含む広義の文脈である。従来、この問題に関して言及がなされてこなかったわけではない。特にモダリティとの関連については、多くの先行研究で取り上げられている。しかしながら、なぜそのような形式が比較副詞の容認可能性を上げるのかについては、あまり触れられていない。3.1では、事実／非事実⁽¹⁾の区別を導入し、当該の対象とその比較対象がどのように位置づけられるかをみる。それに基づき、3.2では話者（＝認知主体）の判断・心的態度がこれらの副詞の容認可能性に与える影響をみる。3.3では否定と比較副詞の共起性を言語の意味的ユニットの観点から扱う。

2 比較副詞が共起できる語彙

「もっと、ずっと」などの語彙がスケール上において2つの対象を比較するものであることから、これらの語彙が直接修飾する語彙は、典型的にはスケールに対応する概念を表わすもの、すなわち品詞的には形容詞、形容動詞である。渡辺（1985: 67）では、この後続する語彙を「状態性の概念の語」と呼んでいる。

1. こちらの橋の方がずっと長い。
2. あの授業は宿題がもっと多い。

© 高水 徹「比較副詞の容認可能性と文脈」

『言語科学論叢』第9号（2003）、pp. 137-149.

「長い」「多い」は、形容詞であり、また段階的 (gradable) な語彙である。したがって、これらの語彙に関して、スケールが喚起され、比較副詞により修飾することができることには何ら不思議はない。これらの品詞が比較副詞によって修飾可能であることは、形式のみならず意味によっても十分動機づけられている。

しかし、先行文献に指摘されている通り、比較副詞が修飾できるのは、形容詞 (以下、「な形容詞」を含むことを明示するため、形容(動)詞という表記を用いる) という品詞に限られる訳ではない。例えば渡辺 (1988: 2) は、「白髪が多少増えましたね」の「多少」や「酒は多少たしなみますが」の「多少」に関して、以下のように述べている。

「多少」は動詞を修飾しているけれども、「増えた」や「たしなむ」は増減や好悪という、状態性の意義を担う動詞であって、例外と言うほどのことではない。

引用部の考え方は、これらの動詞が「状態性の意義を担う」がゆえに、実質的に形容詞と同じようなものであり、したがってこれらの例は例外ではないというものである。本稿もこれらの動詞を品詞が異なるという理由のみに基づく例外扱いはしない立場をとる (ただし、渡辺 (1988) はこの点に関してそれ以上議論していないので、本稿での考え方とどの程度一致するのかわからない)。すなわち、認知言語学的に言えば、形容詞ではなく動詞であっても、何らかの共通する動機づけに基づき、比較副詞の共起が可能になっているという考え方である。上の例にみるような今まで例外扱いされてきた現象を分析するため、以下ではまず、形容(動)詞以外でどのような語彙が「もっと」「ずっと」などに修飾され得るのかをみたい。

2.1 量が本質的に関わる動詞との共起

以下は、比較的によく見聞きされる、比較副詞と動詞の共起の例である。

3. 本ならあの人の方がもっと持っている。
4. この前はもっとあったのになあ。

「持っている」「あった」などは、品詞としては動詞であるが、前者の場合は「ている」という形式も含め、特定の状態を表わしている。3.では特定の人と「あの人」の所有量が、4.では現在の状態と「この前」の状態が比較されている (図-1)。したがって、これらの例においては、所有量のスケールと存在する量のスケールがそれぞれ喚起されている。

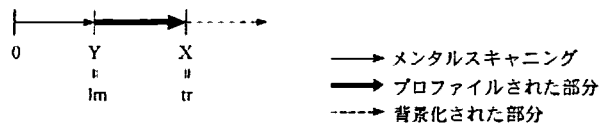


図-1

図-1では、3.におけるトラジェクターである「あの人」の所有量に対し、別のある特定の人

れている。これが比較副詞の基本的な図式である。

しかし、次の例においては、一見状態が表わされているとは考えにくいにもかかわらず、比較副詞が共起可能である。

5. 「太郎はよく食べるね」

「でも次郎の方がずっと食べるよ」

この例の「食べる」がそれ自体で何らかの状態を表わしている（つまり、典型的な形容詞の性質をもっている）とは言えないだろう。しかし、「よく」と共に用いられる場合、慣用化した表現として、食事の量が多いという性質を表わすようになる。それゆえ、その性質のスケールが喚起される。5の場合、(i)「太郎はよく食べる」が単独で発話可能であり、かつ(ii)第一話者が実際にそれを発話していることが、「よく食べる」という性質のスケールの喚起を可能にしているのである。以下は、この前者の点、つまり単独での容認可能性の動詞による違いを示したものである。

6. a. 太郎はよく食べる。

b. よく食べる人

7. a. ? 太郎はよく読む。

b. ? よく読む人

「読む」も「食べる」と同様に、直接関係する項が典型的には物質的な対象であり、それらは必然的に具体的な量を有している。つまり、量のない食べ物や冊数と無関係な本は考えられない。だが、「直接関係する項が量と関係する動詞の場合、比較副詞が共起できる」と言えないのは、上の差異からも明らかである。⁽²⁾ すなわち、7.a.の単独での容認可能性に問題がある以上、8.も同様である。

8. ? 次郎の方がずっと読む。

ただし、「太郎はたくさん本を読むねえ」に対する答えとしては、

9. a. 次郎の方がずっとたくさん読む。

b. 次郎の方がずっと読む。

のように、恐らく容認度は上がるだろう。

ここで、「読む」の場合には、「たくさん」を含む先行発話が容認可能性の判断に非常に大きな影響を与えていることに注意する必要がある。これは「よく食べる」の慣用化によって生じた差異であるが、このことは、一般的に「食べる」の場合には量がより重要であるのに対し、「読む」においては量はそれほど重要ではない、ということを示唆している。

ただし、ここで主張しているのは読むという行為にとって量が全く本質的ではないということではない。読むという行為に関して量が本質的になる文脈も考えうる。しかし、飲

食（食べる）、所有（持っている）、存在（ある）などの行為と比較すれば、読むなどの行為の場合には、量の関係する状況が少ないことが予想されるし、したがって言語の慣用化において、6.は許容されやすいが7.は許容されにくいという差異が表われたと考えられる。このように、容認性や慣用化の度合は、主体の状況によって決定される。

2.2 可能形によるスケールの喚起

典型的には量が本質的に関わらない行為を表わす動詞でも、可能形ならば比較副詞との共起が全く問題ないものがある。

10. ? 近藤はもっと泳ぐ。
11. 近藤はもっと泳げる。
12. ? 佐藤の方がずっと投げる。
13. 佐藤の方がずっと投げられる。

これらの可能形は、当該する行為の可能性のスケールを喚起するため、そのスケール上での比較が行なわれ、それがこのような言語形式となっているのである。なお10.や12.は話者によっては容認可能であろう。それには2つの理由が考えられる。1つは、その話者にとってはこれらの行為の量が問題となる文脈が全く不自然でない場合である。例えば、スポーツジムに頻繁に通って泳いでいる話者なら、10.を自然に発話するかもしれない。つまり、日常的に泳ぐ量、つまり距離を話題にしたり、考えたりすることで、その行為と量が密接に結びついているからである。もう1つは、一点目と無関係ではないが、これらの行為の量ではなく、時間的側面に焦点が当たっている場合である。これらの行為においては、時間と量が相関しているため、そのどちらの側面が「もっと」などの副詞によって修飾されているかを一義的に決めるのは意味をなさないだろう。

上記のように容認される場合も考えられるものの、基本的には、10.と11.、12.と13.の対においては、それぞれ11.、13.がより一般的に受け入れられやすい例である。しかしながら、10.、12.と類似していても、広く容認可能である動詞もある。

14. 太郎の方がずっと勉強する。
15. 一郎はもっと練習する。

などが、その例である。これらは、上でみた「食べる」と同じ意味で具体的で量のある対象に関する行為ではない。確かに勉強や練習の対象には量があるが、対象自体の抽象度が「食べ物」や「本」より高くなっている。

さらに、次の例は時間と量が相関しているという点を既にみた動詞と共有しているが、その対象は項としては表われないし、言語化することも難しい。

16. 太郎の方がより働く。
17. * 太郎の方がより仕事を働く。

これらの例を可能形にすると、

18. * 太郎の方がずっと勉強できる。

19. * 一郎はもっと練習できる。

20. ? 太郎の方がより働ける。

のようになり、先程の10.から13.とは容認可能性が異なる。この違いは、「泳げる」がある個人の泳ぐ能力に言及できるのに対して、「勉強できる」や「練習できる」は個人の勉強や練習の能力に言及できないからだろう（もちろん、後者の場合、普通は「勉強ができる」などの形式が用いられる。）。

以上、量や時間の観点を中心に動詞と比較副詞の容認可能性を考察してきたが、次のような動詞は、これらと違うスケールにおいて比較がなされている。

21. しょうゆのシミはもっと広がる。

22. あちのドアはより開く。

この「広がる」や「開く」は、それぞれ「広がった状態になること」「開いた状態になること」を表わしている。つまり、状態変化の動詞である。この場合、問題になっている状態の程度のスケール上で、2つの対象が比較されていることになる。

2.3 相対的位置関係の名詞

比較副詞が位置、方角などを表わす名詞の一部と共に起できることは、先行研究においても扱われてきた。中でも佐野(1997)は形態論的観点からこの問題を明示的に議論している。この中で、それらの名詞は「相対的広がりをもつ時空間の名詞」と呼ばれ、「右、左、上、下、南、北、こっち」などがこの分類に該当する（さらに「大勢」などの「数量を表す名詞」も取り上げられているが、ここでは議論しない。）。

23. もっと{右/西}へ！

24. 彼の家はずっと南だ。

25. もっと前に出てください。

これらの「右、西、南、前」のように、相対的位置関係を表わすものが比較副詞と共に起できるのに対して、以下の絶対的位置を表わす名詞は、比較副詞と共に起できない。

26. * もっと東経135°へ！

27. * もっと5m前に出てください。

相対的位置関係を表わす語彙は、比較対象Yに対してXが相対的にどの方向に位置するかを表わす。これに対して、絶対的位置を表わす語彙には、比較対象Yが関与する余地がない。そのため、Yを要求する比較副詞とは共に起できないのである。

しかし、次の例にみる「隣」や「次」は、一見比較対象Yが存在するにもかかわらず、「も

っと」や「ずっと」と共起できない。

28. *{もっと／ずっと}隣へ!

29. * より次にしてください。

この現象は (i) 「隣」, 「次」などでは隣接する2つの対象の関係が問題にされているのに対し, 「東西南北, 左右, 前後」では方向性が問題にされており, (ii) したがって前者は段階的にはなり得ないが, 後者は段階的になり得る, という差異に基づいている。以下は, 一見段階性とは無関係だと思われる「東西南北, 左右, 前後」などが, 段階的になりうることを示している例である。

30. どれくらい右ですか?

31. どこまでも東へと進む。

「どれくらい」は段階語としか共起できない。言い換えれば, 共起する語の程度性を問題にする語彙である。「どこまでも」の場合は統語的には「どれくらい」と異なっているものの, 段階的でなければこのような共起は不可能である。段階的でなければスケールも喚起されず, その結果, 28.や29.にみられるように, 比較副詞との共起は不可能になる。⁽³⁾

2.4 様々な名詞とスケールの喚起

比較副詞の使用には, すでにみたように, 比較対象が必要であり, 何らかのスケール上で比較が行なわれなければならない。これらの条件に基づけば, 以下の「変わった」例も説明可能である。

32. 彼の方がもっと子どもだ。

33. より大人の対処の仕方を学ぶ。

言うまでもなく「子ども」や「大人」は相対的位置を表わす語彙ではないが, 子どもや大人のある性質を表わすスケールが喚起できるため, これらの例が容認可能になる。「子ども」や「大人」はそれぞれ, 未熟度, 成熟度を表わす語彙としてある程度慣用化されているが, 次の例は慣用化されていないにもかかわらず, 特定の文脈においては容認可能になるものである。

34. オレの方がもっとてんぷら屋だ。

35. その方がより日本語だね。

36. あの本と比べたら, この本はずっと哲学だ。

この一見特殊な例は, どちらがより良い, ふさわしいかを比較したり, 争ったりする文脈では用いることができる。34.は自分の方がより良いてんぷら屋であると主張しており, 35.は日本語として適切, あるいは日本語らしいことを表わしている。36.も同様である。特に, 35.と36.は日本語的, 哲学的とそれぞれパラフレーズしても, 基本的な意味に変わりはない。

このように、比較副詞は、後続する名詞に関して適切性、良さ、典型性などが比較される文脈では容認可能になる。

一方で、適切性、良さ、典型性などが想起できないような名詞は、当然比較副詞による修飾ができない。

37. * こちらのほうがもっと固体です。

38. * この方がずっと壁だ。

37.にみられるように、厳密に定義された科学用語などには比較副詞が共起できないものが多い。37.において、固体であり、同時に液体であるという状態が、少なくとも科学的文脈ではあり得ないため、「もっと」が容認不可能になっている。また、壁の性質に程度性を考える状況は一般的にはあまりないだろう。

ただし、そのような厳密さを必要としない日常言語においては、次のような例もあり得る。

39. 豆腐よりチーズの方がもっと固体です。

比較副詞と名詞の共起性が扱われる際、一般的には位置や方角を表わす名詞については触れられるが、ここでみたような「変わった」例は扱われないことが多い。だがそれらを取り上げることによって、どのような場合に容認可能になるのかがより明らかになる。名詞自体が慣用的にスケール上での比較を喚起するか、あるいはその名詞の典型性、適切性などのスケールが文脈上喚起できる場合に、比較副詞は名詞を修飾できるのである。

3 事象のとらえ方と認知スケール

2では比較副詞が修飾する語彙を形式面から分類し、それに基づいて分析を行ってきた。しかし、これらの副詞の容認可能性を決定するのは直接の修飾関係にある部分のみではない。以下では、より広い文脈がどのような影響を与えるかについて、認知スケールとの関連と、意味的ユニットの観点から議論する。

3.1 事実／非事実の区別

木下(2001: 18-23)は、「もっと」の比較には「視点」が関わっているとし、視点と比較の基準について以下のように述べている。

「もっと」は「現在」あるいは「現在の状態」を比較の基準とし、未来や過去をもう一方の比較対象とする場合がある。(木下2001: 19)

40. 今日例の荷物を送ったから、そっちに着くのはもっと先だ。

41. (レストランで料理を食べながら)前に食べたときはもっとおいしかった。

(木下2001: 19)

40.では、時間に関し、「今」という比較基準に対して「もっと先」であることが示され、41.では「今のおいしさ」という比較基準と「前に食べたときのおいしさ」が比較されている。ここではまず前者、つまり現在と未来の比較に注目したい(41.は次節で扱う)。40.における比較基準YとXとの関係は、事実(realis)と非事実(irrealis)の区別に対応する。⁽⁴⁾この区別を導入することで、単にYが現在、Xが未来にそれぞれ位置づけられるのみでなく、より広い視点からの説明が可能になる。というのは、この現在と未来の区別を事実/非事実の対立を介して文末表現(あるいは日本語学で広義のモダリティと呼ばれるもの)と関連づけることで、なぜある種の「もっと」の用法において特定の文末表現が要求されやすいのかが統一的に説明できるからである。

比較基準Yが現在で、Xが未来である場合は、40.の他にも、以下のような例が考えられる。

- 42. もっと前へ!
- 43. もっとゆっくり!
- 44. もっと利口になれ!
- 45. 一見反例にみえる例も取り上げれば、君の論文はずっと良くなる。

このように、現在の状態に対して、特定のスケール上でそれよりも右に位置する状態になることを要求・命令するものや、条件を満たせばそのような状態に変化することが述べられているものがある(図-2を参照)。

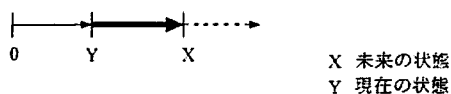


図-2

42.から45.は、実際にその状態になるのが未来である、という共通性がある。つまり、未来における状態の変化である。以下の例もその点で類似しているものである。

- 46. 首相には、もっと具体的に語って欲しい。
- 47. この結果をもっと真摯に受け止めてもらいたい。
- 48. もっと裕福になりたいなあ……
- 49. 来年はもっと勉強しよう。

例えば46.では、仮により具体的になるとするならば、その実現は未来である。このように、これらの例においては、確かに未来における状態の変化が表わされているが、その実現可能性に関しては未知数である。したがって、事実の比較基準Yと、非事実のXがスケール上で比較されていると考えることができる。先にみた要求・命令の例も、たとえ話者に強制力があつたとしても実現するかどうかは確定していないし、実現するとしてもそれは未来においてである。その点で、要求・命令は願望と連続的にとらえることができる。

3.2 文末の形式による比較対象の位置づけの変化

そのように考えると、「もっと」が「～べき」と共起している以下のような例も特殊なものとして例外的に扱う必要はなくなる。

50. 日本はもっとリーダーシップを発揮すべきである。(奥村1995:97 より改変)

51. この電話をもっと普及させるべきだ。

義務性は非事実の世界と対応し、これが事実の世界 (=現状) と比較されていると考えれば、これらの例は3.1でみたものと同様にとらえることができる。また、この比較によりスケールが喚起され、比較副詞がより共起しやすくなるのである。

さらに、以下の例では、比較対象Yが現在(事実)である点は3.1でみた例と同様だが、「た」という過去の形式が用いられることにより、Xが未来ではなく過去の状態に言及している。

52. (レストランで料理を食べながら) 前に食べたときはもっとおいしかった。(再掲)

53. (店頭で商品を見て) え、もっと安かったのになあ。

過去は未来とは違い、普通は事実属する。実際、Givón (1995:116) ではrealis (またはpresupposition) として扱われている。しかし、過去の事象が現在と同様の事実性をもつとまでは言い切れない。なぜなら、過去は未来と同じく現在からは距離があり、現在の事象と比較すると、そのリアリティにおいて同等ではないからである。その意味で52.と53.は、まだ議論の余地はあるにしても、Xが未来である例と同様にとらえ直せる可能性がある。

さらに、次の例文のように単純に時間的關係からは説明できないものも、非事実性の観点からとらえ直せる。

54. (店頭で商品を見て) え、もっと安いはずだ。

この例における認知スケールは安さのスケールであり、右側へ行く程安いことを表わす(図-3)。この例では、認知主体にはあるふさわしい価格が「事実」として存在し、それと店頭での商品価格が比較され、後者が非事実として位置づけられている。これは客観的科学観に基づく事実性の認識とは全く異なり、認知主体の主観性の関与なくしてはあり得ない。42.から45.も、前節では単純にXを未来に位置づけたが、より一般的な非事実という位置づけが適切であろう。

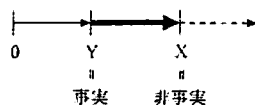


図-3

以下の例では過去から現在への変化が述べられている。

55. (書き直された論文を見て) ずっと良くなった。(高水2003: 76)

56. 3月になってずっと暖かくなった。

これらでは、過去の状態が比較基準Yであり、それに対する現在の状態がXである。この場合、「なった」という形式が必要になるようだ。「なった」なしの際には、やや容認可能性が低くなる。

57.? (書き直された論文を見て) ずっといい。

58.? 3月になってずっと暖かい。

もちろん、58.における「ずっと」を最近の一定期間の継続という意味で解釈すると、多少容認できるようになる(だがこれはもちろん比較副詞として機能しているとは言えなくなる。)

より重要なのは、比較対象を言語的に明示すると、これらが完全に容認可能になる点である。

59. (書き直された論文を見て) 前のよりずっといい。

60. 3月になって2月よりずっと暖かい。

さらに、Xの方を明示しても同様な効果が得られる場合があるようである。

61. (書き直された論文を見て) この方がずっといい。

62.? 3月になって今の方がずっと暖かい。

これは恐らく、Xの明示によってYの存在が一義的に決定されるような文脈であるという事実依存しているのであろう。

3.3 否定と段階性による容認可能性の決定

前節では命令・要求や願望などと比較副詞の共起の問題を扱った。同様に、事象に対する主体のとらえ方が密接に関わる形式の1つに否定がある。そこでここでは比較副詞と否定との共起について、特に意味的ユニットの観点から論じたい。比較副詞は一般に、「ない」を用いた否定と共起できない。

63.* こちらの電球はもっと明るくない。

64.* 彼の顔の方がずっと白くない。

ただし、「というわけではない」という迂言的表現なら可能である。

65. こちらの電球がもっと明るいというわけではない。

66. 彼の顔の方がずっと白いというわけではない。

これらの例における否定のスコープについて、63.と64., 65.と66.の対を対比すると、「比較副詞+形容(動)詞」を否定することはできるが、「形容(動)詞+否定」と比較副詞は共起できない、と一般化できる。

しかし、この区別は絶対的なものではない。「形容(動)詞+否定」が言語的なユニット

として1つのまとまりをなす場合には、比較副詞と共起できるようになる。

67. ここはもっと安全でない。

さらに、次の例のように、もはや「ない」という否定の形式が分析的にとらえられていない語彙の場合でも、同様に容認可能である。

68. あの人の心づかいはもっとさりげない。

69. 彼の方がずっとだらしない。

70. 水道はともかく、電力はもっと安定していない。

70.のように、動詞に「していない」が後接している場合も、ちょうど71.のように基本的な意味を変えずにパラフレーズできることが示すように、「安定していない」が1つのユニットになっていると考えられる。

71. 水道はともかく、電力はもっと不安定だ。

72. 彼女の方がずっと無作法だ。

73. この町はより不衛生である。

72., 73.も、接辞的な否定と比較副詞との共起が可能であることを示す例である。ただし、ここでも接辞的な否定かどうかという形式的問題ではなく、その概念が段階的にとらえられているかどうかという主観的側面が容認可能性を決定している。つまり、

74. * 彼との方がより無縁だ。

75. 彼との方がより縁がない。

74.における接辞的な否定を含む「無縁」は段階的ではないので、「より」と共起できないが、75.における「縁がない」は段階的であり、それゆえ共起できる。このように、形式面において分析的であれ、接辞的であれ、否定とその修飾する部分とが1つの意味的ユニットとして機能し、かつ段階的であれば比較表現と共起可能であり、そうでなければ不可能である。

4 結論

第2節では、比較副詞が修飾する語彙を主に形式的観点から分類し、考察を行なった。その結果、どのような品詞や形式であるかということよりも、それらの語彙が表わす内容がどのようなものであるかという要因により、比較副詞の容認可能性が決定されていた。すなわち、その語彙の何らかの側面がスケールを喚起することができれば、比較副詞は容認可能であるし、そうでなければ容認可能ではない、ということがわかった。

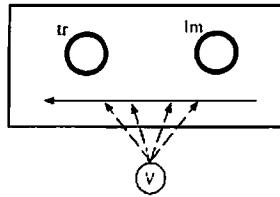
第3節では、より広い環境、例えば文末の形式などにより、比較副詞の容認性がどのように影響を受けるかを調べた。これらは、日本語学で広義のモダリティ（例えば益岡（1991）など）と呼ばれるもの、つまり命令であるか言いきりであるかというような差異が、比較

副詞との共起にどう影響するか、という問題を含んでいる。第一に、事実／非事実の区別を適用することで、テンスの問題と文末の形式の問題を統一的に説明できた。つまり、一見複雑に思える比較対象YとXの関係が、過去から現在への変化を表わす文脈なら過去と現在との関係であり、願望を表わす文脈では事実と願望（非事実）の関係だった。そして、比較副詞の容認可能性はこれらの関係がスケール上に位置づけられるかどうか依存していた。第二に、比較副詞と否定との共起については、その形式的な区別にかかわらず、否定を含む部分が1つのユニットとして段階的なら、これらが共起することができた。

このように、比較副詞が容認可能になる文脈は、形式的な基準のみによっては決定できず、常に意味的基準にも影響を受ける。このような基準は主観的なものであり、したがって認知主体である話者によって容認可能性が異なることもある。また、微妙な文脈の差異が容認可能性を左右するという事実は、本稿の結論を支持するものである。なぜなら文脈の差異は主体の認知に影響を与えるものだからである。

【注】

- (1) この区別は、Akatsuka (1985)、赤塚・坪本 (1998) などのrealis/irrealis の区別である。
- (2) 一般的に、直接関係する項が量と関係しない場合、例えば動詞「消える」の場合、比較副詞は共起しづらい。ただし、「あの人はよく消える」「でも次郎の方がもっと消える」のように、「消える」を「いなくなる」の意で用いている場合は容認可能である。この場合、量ではなく頻度のスケールが喚起されているからである。
- (3) 山梨 (2000: 58.9) において、「～の左」と「～の右」においては、トラジェクターとランドマークの認定およびスキヤニングの方向が逆転することが示されている。



(山梨 2000: 58)

「隣」もトラジェクターとランドマークの認定については同様であるが、こちらの場合にはどちら側にあるかという情報は含まれていない。その場合でも基準となるランドマークからトラジェクターへのスキヤニング自体は存在すると考えるのが自然である。一方「次」は、碓井 (2003) において「アト」の拡張を分析する際に導入されているような順序 (Order) の概念を適用して分析する必要があるだろう。

- (4) 赤塚・坪本 (1998: 27) は非事実を「発話時の話し手の意識のなかに、すでに事実として登録されていること以外のすべてを含む広い概念」としている。この際、事実とは主観的なものである。

参考文献

- 阿部宏 2003. 「多かれ少なかれ」における尺度の性質について, 『日本認知言語学会第4回大会 Conference Handbook』, 79-82.
- Akatsuka, Noriko 1985. "Conditionals and Epistemic Scale," *Language*, 61, 625-639.
- 赤塚紀子・坪本篤朗 1998. 『モダリティと発話行為』, 東京: 研究社出版.
- Givón, Talmy 1995. *Functionalism and Grammar*. Amsterdam: John Benjamins.
- 木下恭子 2001. 「比較の副詞「もっと」における主観性」, 『国語学』, 52-2, 16-29.
- 益岡隆志 1991. 『モダリティの文法』, 東京: くろしお出版.
- 奥村大志 1995. 「「もっと」についての考察」, 『日本語教育』, 87, 91-102.
- 佐野由紀子 1997. 「程度副詞の名詞修飾について」, 『日本学報』, 16, 121-133.
- 佐野由紀子 1998. 「比較に関わる程度副詞について」, 『国語学』, 195, 1-14.
- 高水徹 2003. 「程度や比較の副詞と認知スケール「もっと」を中心に」, 『日本語文法学会第4回大会発表論文集』, 73-82.
- 碓井智子 2003. 「空間から時間へ～「アト」(跡・後)の認知的観点からの考察～」, 『日本認知言語学会論文集』, 3, 63-73.
- 渡辺実 1985. 「比較の副詞」, 『学習院大学言語共同研究所紀要』, 8, 65-74.
- 渡辺実 1988. 「潜在比較副詞」, *Sophia Linguistica*, 23/24, 1-7.
- 山梨正明 2000. 『認知言語学原理』, 東京: くろしお出版.